

「自由意志」について

— 「自由」、「自由意志」あるいは「自由意志による自己責任」 —

金森 明男

もくじ

1. 疑問の始まり
2. 自由意志（選択の自由）の成立、同時に、唯一の神の成立、の歴史的背景
3. 平等

1、疑問の始まり

1807年にイギリスの奴隷貿易を終わらせた奴隷廃止論者の勝利は、「自由」な労働という観念の誕生と一致するものであるが、それまでイギリスの労働者を保護していた法律も一貫して削除されたため、新しい時代にあわせた労働規律の形式をつくる必要があった。

そこで問題となったのは労働の搾取ではなく、その労働に自発的に服従させるためのフィクションを維持することであった。「炭鉱および製塩所に生活を拘束されていた」イングランドやスコットランドの労働者が起こした訴訟において、裁判所は「産業奴隷を人権の侵害として非難しなかった」。というのも、「労働者はたとえ實際上永続的な従属関係にとどまろうとも、わずかな賃金であれ承諾したのであれば自由人と定義されうる」からである。

（スーザン・バック＝モース『ヘーゲルとハイチ』94頁。太字強調は引用者、以下同様）

「なお、この文章の中で彼女が引用しているのは、アメリカの歴史家デヴィッド・ブリオン・デイヴィスの『革命の時代における奴隷制度問題』（1975年）である。」

（植村邦彦『隠された奴隷制』96頁）

これらの状況・事態に対して、非常に違和感、違和感と云うより拒否反応があったのですが、何が拒否反応の要因かと見た時、「自由」の文字が付いて廻っています。

で、これが、自由と云えるのか？

2、自由意志（選択の自由）の成立、同時に、唯一の神の成立、の歴史的背景

宗教上の話が登場するのは、自由意志を主張しているのが宗教上の話と知ったからです。但し、宗教上の知識など無いのですが、より正確には、まるっきり知りません。

しかし、歴史上の物語として見る書物に出会いました。その指摘から、新しい視点が開けてきました。

以下は、トーマス・マーレー『ヤバい神 不都合な記事による旧約聖書入門』からの引用です。

「なぜ、同じ神がさまざまなかたちで語られているのだろうか。この問いに対する答えは、必然的に歴史的な探求となる」 (トーマス・マーレー『ヤバい神』25頁)

「君主制の成立に伴い、ヤハウェは部族の神から国家の神へと変貌した」 (同、28頁)

「国家神は健康と幸福を保証し、大地の豊穡と家畜の増加を促進させる。国家神は共同体内部のバランスを確保する最高位の裁き手である。国家神は特に戦争の際、民を守り助けることが期待されている。」 (同、30頁)

「エルサレムは破壊され、ユダの要人たちがメソポタミアに連行されたことが起こした衝撃は想像するに余りある。実際、紀元前 597 年から 587 年にかけて起こった出来事は、王国時代に国家神崇拜を支えていた柱をすべて破壊した。 中略 ユダの人々や彼らの神の存在意義は、もはや従来の文化的・政治的な諸制度によって維持できなかつた。ヤハウェとは何者なのかを別のかたちで表現する方法を見つけなければならなかつたのである。」 (同、36～37頁)

「捕囚という災いが起きたのはイスラエルの人々や歴代のイスラエルの神のみを礼拝することなく、その法に従おうとしなかつたからだと考えた。従って、エルサレムが滅ぼされたことは、ヤハウェが無力であることを示すものではなく、ヤハウェの民が彼らの神に従わなかつたために自ら、招いた罰だったのである。」 (同、38頁)

自由意志（選択の自由）の結果だと考えたのだから、在るのです。自由意志の登場です。自由意志を在るか無いかと検討して在るとしたのではなく、最初から在るのです。

「伝統的な諸構造なしにどのように神を崇めるのかという問題でもあった。この問題意識をもって、彼らは創世記 1 章の創造物語に始まる文書を編集したのである。この物語は安息日の制定で終わっており、(創世記 2・1～3)、当時の他の創造神話が神殿建設をもって終わっていることと対照を成している。つまり、聖なる空間は聖なる時間へと変化したのだ。場所よりも時に重きを置いた祭儀によって、神は崇められうるのである。神殿を失った民にとって、これは必要不可欠であった。」 (同、39頁)

「一神教の理論を最初にはっきりと打ち出したのが、イザヤ書の第二部 (40～55 章) にその予言が収録されている、第二イザヤと呼ばれる無名の預言者であることは間違いない。そこではヤハウェのみが神であると認識され、それ以外の神はすべて空想の産物に過ぎな

い。「私は初めであり、終わりである。私のほかに神はない」(イザヤ書 44・5) 諸国民の神は、たとえ勝者の神であったとしても偶像であり、「薪」(44・15) でできたものに過ぎない。44・9にはこうある。「偶像を形づくる者は皆空しく、彼らが慕うものは役に立たない。彼ら自身が証人だ。彼らは見ることもできず、知ることもできず…」ここにおいて旧約聖書は一神教を衝撃的かつ力強く、神学的に完成されたかたちで表現している。この言葉はヤハウエの主権を認めるのがきわめて困難な状況のもとで生まれた。だが、(捕囚と占領という)この危機的な状況において、一神教的な信仰告白が生まれたのである。」 (同、41 頁)

唯一の神の登場です。

「この信仰が言い表す神は世界の創造主にして人類全体の運命を統(す)べ治めると同時に、自ら選んだ民であるイスラエルとの間に特別な関係を持つ。歴史学者の研究によると、このヤハウエ信仰の進化は、すぐに皆に受け入れられたわけではなかった。ここでは南エジプトのエレファンティネにあった、ユダヤ人共同体を挙げれば十分であろう。そこでは紀元前五世紀になってもなお、ヤハウエを三神一組の一神として崇めていたのである。」 (同、42 頁)

自らの存続をかけて考え出されたのだから、当然なのでしょうが、選民思想の登場です。一方では、受け入れられるまで、時間がかかった。

「ヤハウエはまるで、人間のカップルに過ちを犯させようとしているかのようである。一見驚くことではあるものの、このことは創世記 3 章を理解する上で有益だ。つまり、これは人間の自由についての考察なのである。」 (同、157～158 頁)

「人間が自らの自由を行使し、神が与えた命令に背くことを、神自身が促している。」 (同、158 頁)

「自由意志に関する問題である。どの程度まで、人間は自らの運命の自由で絶対的な支配者であるのか。そしてどのようなかたちで、人間の自由は神に依存しているのだろうか。」 (同、158 頁)

この様な問い自体が変だとは思わないのだろうか？ 全知全能で唯一絶対の全てを超越している神の思惑？ を知る事が出来ると考えているのだろうか？ いや、違う様だ。自らが作り上げた神だから、神の存在を確かめているのだ。しかし、答えは見つからない。

王国を破壊された民族は、それでも存続するために、神を必要としたが、その神が征服者

の神より下位の神では存続出来ないだろうから、唯一の神を創造し、そして、滅んだ理由を、神のせいではなく、神に権威を持たせるために・損なう事が無い様に、自らの行動に求めた（自由意志、選択の自由）。

唯一の神の成立史は、何も根拠が無い様に見える。こう云えば、間違いなのだろうけれど、根拠にしたのが、単に一地方の一民族の物語、歴史から生まれた物語でしかない。だから、当初、承認されなかった。だけれども、望む意味合いで通用する事になれば、絶対的な権威となる。

とすれば、紆余曲折を経て成立したと認識出来れば、一步距離を置いて、絶対視するのではなく見る事が間違いとは思われない。だから、自由意志についても同じですが、それは、自分たちが神に忠実でなかった事、これを、リンゴを食べた話に書き換えて、自由意志で選択したと、すり替えたのです。

思う事は、自由意志を介して悪を行う行為について、です。

孟子は性善説を説いて、荀子は性悪説を説きました。孟子にとって、性は善だけれど、そのままでは、悪に染まるから、教育が必要とし、荀子は、悪なる性を教化するために教育を説きました。

一方では、悪に対して、自由意志を持ち出し、他方では、教育の重要性を問題にします。さらには、国家の存亡に対して、唯一の神を持ち出し、他方は国家の存亡を必然と見ているように思います。ですから、一方は、自由意志を必要とし、他方は、自由意志など持ち出さなくても、十分に語ります。

『孟子』より引用します。

齊（せい）の宣王（せんおう）が問うて言うに、「昔、殷の湯（とう）王は、前代夏の桀（けつ）王を南巢（なんそう）の地に放ち、周の武王は、前代殷の紂（ちゅう）王を征伐したというが、そんなことがあったのか。」と。

孟子が対えて言うに、「伝説にそのようなことが言われております。」と。

さらに王が言うに、「湯は桀の家来であり、武王は紂の家来であるが、家来であるのにその君を殺してよいのだろうか。」と。

そこで、孟子が言った。「もちろん、家来がその君を殺していい道理は決してない。だが、仁の行ないをそこなうような者を賊といい、人の道をそこなうような者を残というのであり、この残賊の人などは、これはもう王でもなく、君でもなく、単なる一人の卑賤な男にすぎない。このような天命も去り人民からも見放された一夫たるにすぎない紂を誅したという事は聞いているが、まだ君を殺したというようなことは、聞いていないのである。」と。

（『新釈漢文大系・4・孟子』（通釈）66頁）

「古代中近東の教育においては、約束には正しい行動に対する祝福と不誠実な行いを防ぐために呪いが伴うのが常であった。」(『ヤバい神』157頁)と云う状況が普通にあったので、この様な発想を覆すには、唯一の神を作り出し、自由意志を作り出す必要があったのは、確かにそうなのかもしれませんが、しかし、自由意志などと云わなくても、当時から現代に至るまで、機能している世界もあるのです。

不思議なのは、素朴に自由意志で行動出来るのは、良い事のように見えるけれど、二つ疑問です。

- ・ 自由意志で良い事も悪い事も出来るのであれば、悪事を容認しているのではないか？
- ・ 悪事を許容しない歯止めは何か？ あるのか？

どう考えてよいかわかりませんが、しかし、漠然と、結果的に、許容しているし、歯止めが無いと思ってしまいます。

一つだけ、納得したことがあります。

トランプ元大統領ですが、長老派の信者なのだ、そうです。長老派がキリスト教の中で、どの様な立ち位置にあるか知りませんし、ましてや、その教えの内容も全く知りません。

しかし、長老派の信者であれば、宗教上の倫理観・道徳観があり、嘘や相手への誹謗中傷には歯止めがあるのではないかと、素朴に考えていましたが、全く違う様に見えます。(教会の方で制止している様子も見えない。)これは、はっきり私の誤解・間違いでした。自由意志(の自己責任)を宗教上の意味通りに、正確に、使っているのでしょう。

正しいと認識出来れば・思い込めば・先入観でも・偏見でも思い込めば、錯覚であろうと・全くの誤解であろうと・単に利用しているだけであろうと、自由意志の自己責任で、何でも出来るのです。何をやってもよいのでしょう。

××原理主義者(自分が正しいとの見解に凝り固まった者、だから、他者の話は聞かない、聞けない。)と云う最悪な存在の誕生です。以上の経緯からすれば、常に最良な部分(自由意志の自己責任が全て悪いとは云えない、のは、勿論です。)だけが発現する可能性は低いでしょうから、自由意志の自己責任を介して、必ず、出現します。

とすれば、二つ問題があります。

- ・ ××原理主義者と○○原理主義者が衝突したらどうなるのか？ 出口が見えません。社会の分断などは、当然の結果となります。

多分、××原理主義者と他の普通の人の間でも、同様でしょう。

- ・ ××原理主義者誕生の素地さえあれば、多くの場合、善意からの行動なのだとしても、独裁者が、どの国に出現しても驚く事にはなりません。

「現実には分離の種を蒔くような一切のもの、さまざまな階級にその権利や利害の対立によって、相互の不信と憎悪とを吹きこみ、従ってそれらすべての階級を抑える権力を強めるような一切のものが、首長等によって助長されるのが見られるであろう。この無秩序とこれらの変革のなかからこそ、専制主義が、その醜悪な顔を次第にもたげ、国家のあらゆる部分に善良で健全なものと自分に認められる一切のものを貪りくらい、ついには法律も人民も足下に踏みにじり、国家の廢墟の上に自己を確立するに至るであろう。この最後の変化に先だつ時代は、混乱と災害との時代であろう。しかし結局すべてが怪物に飲み込まれてしまい、人民はもはや首長も法律ももたず、ただ僭主だけをもつこととなる。」

(ルソー『人間不平等起原論』126頁)

それともう一つは、宗教上の話では無く、社会の中で、神から切り離された後も、自由意志は在るとして・無根拠に在るとして継続し、現在に至ります。

その使用例が次の通りです。

「労働者はたとえ實際上永続的な従属関係（産業奴隷）にとどまろうとも、わずかな賃金であれ（自由意志の自己責任で）承諾した（契約した）のであれば自由人（自由意志のある人）と定義されうる」

(スーザン・バック＝モース『ヘーゲルとハイチ』94頁。括弧内は引用者加筆)

騙されたのでもなく、正式な契約が成立したとされるのです。立場の強弱、すなわち、本意ながらも、その様な契約でも承諾しなければ生きていけない状況に追い込んでいても、追い込まれていても、契約は成立します、でなくて、成立させるのです。

産業奴隷、ワーキングプアと言い換えても変わりませんが、新たに奴隷を合法的に作り出しています。これの酷い所は、自由意志の自己責任とすれば、自らが逃げ道を塞いでしまうのです。自らが選んだのですから、逃げ場がありませんが、これが自由意志での契約です。

しかし、自由意志の自己責任と云われても、根拠を示しての発言でなければ、異議を申し立てるだけです。努力が足りないなどとするのは、誤解以前に、根拠を示せない・出来ない事を誤魔化すための手段でしかないでしょう。この様な使い方は、恣意的にしかありませんし、実際、恣意的に使っています。

ですから、自由意志が、意図をもって立ち上げられたと思いつ事出来れば、最初から自由意志で行動したと、思い込んでいる事・刷り込まれている事を知り、自覚出来れば、一

度立ち止まって、検討する・考える事が可能です。

ここまで来てやっと気付いた事があります。

事の始まりは「創世記」です。「創世記」から引用します。

「主なる神はその人に命じて言われた、『あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう。』」
「創世記」2章(『旧約聖書』3頁)

「善悪を知る」とは如何なる事態なのだろう。

ある一つの事柄、悪かもしれない一つの事柄について、疑いが湧き起り、疑問となり持続され、疑問が大きくなり、精神的な負担として拡大し、時を得て検討する事になるが、自身で考える事には限界があるのだから、常に満足を得られる着地点とはならないけれど、落としどころを見つけ、結論を出し、時には、その結論に従って行動に移すことになるのだろう。(悪い事と判断して、行動しない事も含まれます。) これら、一連の動き、考え・判断して・選択する、これら全てを含めて、「善悪を知る」事になるのだ。これら一つ一つが、自由意志の行使であり、選択の自由なのだ。

神が禁止したとしても、試練を与えたとしての、自由意志(選択の自由)が在ると考えるのだ。ここは、理解出来ないけれど。全知全能で唯一絶対の神なら、結果も知っているだろうに、試練もなにもない。

そして、神は「善悪を知る木からは取って食べてはならない」(「創世記」2章)とはっきり禁止している。だから、与えたのではない。では、人が自由意志(選択の自由)を行使したのか、と問うたなら、自己弁護・責任転嫁の様子を見れば、崇高な理念のカケラもない。ただ、卑屈な人がいるだけ。(神に似せて作っただけだけれど。)

男と女が蛇の誘惑に負けただけの物語ですが、自己弁護の話としか思えません。男が女に責任転嫁し、女がへびに責任転嫁している。創世記3・12、13です。

「人は答えた、『わたしと一緒にしてくださったあの女が、木から取ってくれたので、わたしは食べたのです。』」そこで主なる神は女に言われた、『あなたは、なんということをしたのです。』女は答えた、『へびがわたしをだましたのです。それでわたしは食べました。』」
(同、4頁)

上記では、「人」は神にさえ責任転嫁している様に見えます。

「わたしと一緒にしてくださったあの女」だから、神と「女」に責任転嫁しているのですが、この様な事が、成立して当然な世界なのでしょう。自由意志の自己責任を徹底するなら、

他の人にも自由意志の自己責任を求めるのだろうし、だから、責任追及し、責任転嫁が起こる。そして、「人間の自由についての考察」(『ヤバい神』158頁)なので、完全に自由は在るとして、話が進んでいます。

但し、擁護するとすれば、捕囚期に考えられた物語なのだから、立派な物語には出来ず、むしろ、惨めとさえ思える物語にしなければならなかったのかもしれない。存続するために。

だけれども、これが、自由意志(選択の自由)を与えられたとする根拠にするのだろう。根拠にはならないと思うけれど。

とすれば、自由意志(選択の自由)(だから、考えて判断する事。)には、理性(考えて判断出来る基礎。)(しかし、そうだけれども、理性は人が必要とする状況に応じて、変わります。単に一括りで理性と云っても、意味は無い。)や人間の尊厳(人が考えて、判断した行為が立派だと思える事。)(これも、人の数だけ現れるでしょう。)が必然的に内包されているのだけれど、基準とも云えない、理性や人間の尊厳であれば、恣意的に使われる可能性も確実に内包されている。

しかし、成立条件・成立環境を見る通り、現実的には主張出来ず、非常に観念的です。ですから、一方では、もし、受け入れられたならば、観念的な故に、拡大する余地が残っているのでしょう。

唯一の神といえども、一民族を選んだ時点で、唯一の神ではなく、新しい国家神が誕生したに過ぎなくなりました。ですから、姿を現したのは、ローマ帝国であり、絶対王政であり、植民地宗主国であり、植民地経営の経済基盤を基礎に、その延長線上の資本主義経済体制です。

なぜこだわるのかは、「自由意志」・「理性」が、以下の様に使われるからです。

「すべての人間は自由意志、制約されない意志をもつ」

(ピエール・ショーニュ『自由とはなにか』13頁)

「訳注(七) フルチエール事典には「理性的靈魂だけが〈自由〉をもって生まれた。野蛮人の靈魂は〈自由〉と認識と選択をもって行動しない。」とある。」(同、400頁)

上記の二つから容易に、一方の人が排除されますが、それだけにとどまらず、当然の事に行動が伴います。「理性的靈魂だけが〈自由〉をもって生まれた」と考えた人達の行動です。大航海時代以降の行動です。時間的に前後しますが、コロンブス始め、植民地経営を進めた人達の、先住民に対する考え方が、端的に表されていると、思えるからです。しかし、これに止まらず、現代まで、続きます。優生思想です。

自由意志から派生した、理性や人間の尊厳が、明確に差別と結びついている。いわば、上記は観念的な話ですが、しかし、現実には、世の中で活動していく中で現れます。差別する側と差別される側であり、善と悪であり、在ると無いとでありと、区別し差別する事になりますが、であれば、唯一の神を信奉しているつもりで（××原理主義者）、ゾロアスター教（善悪の二元論）の垂流に成り下がってしまっているのでしょうか。そうとすれば、自身の思い込みでしかない正統性を常に確認しなければ、存続理由が無くなります。で、正統性の確認の手っ取り早い方法は、区別・差別する事です。

3、平等

人間に自由意志（選択の自由）が備わっているとしたのだけれど、各人に自由意志が備わっているのだから、各人・全ての人に自由意志が在ると考えているのだろう。相互間で、自由意志（選択の自由）を行使する事が出来るのだから、対等で平等となるのでしょうか。全ての人とは、征服者、征服された者問わず、でしょう。両者が平等なのです。とすれば、人類が平等なのです。

平等：差別の無い事

自由：他からの拘束を受けないで行動出来る事

差別が無いから、他からの拘束が無いのだし、他からの拘束が無いなら、差別が無いと云える。平等・自由が、相互に前提条件となっているので、ある状態の各側面を示している。平等があって、自由が云える。自由があって、平等が云える。平等自由なのだ。

この様に云えるだろう。非常に観念的ですが、その様に思い込むしかなかったのだろう。バビロンの捕囚期に考えられたのだから、征服者・征服された者区別無く平等自由なのだ。当然だろう。

しかし、それは、無理があります。征服者が認めるはずがないでしょう。だけれども、征服された民はそう思い込む事でしか、存続出来なかったのでしょうか。

現実には、征服者と征服された者の関係の中で、平等自由と主張するのだけれど、征服者に知られてよい教えではない。征服者を否定しているのだから。だから、観念的には平等自由とは考えても、現実の表現は屈折したものとしかならない。征服者が簡単に、直線的に理解出来たら、弾圧の対象になるだけだろう。屈折した表現と云うより、一段と分かり難い表現となる。そうしなければ、この教え自体が生き延びる事は困難と云うより、消滅させられる。

この様な状況下で平等自由を在るとするけれど、他方では、征服者および征服された者と

の差別化を図る事になる。なぜなら、一般的には国が減んだ状態で、民族は存続したいのだから、自分たちは、神に選ばれた民族だ、と思い込まなければならない。

「世界の創造主にして人類全体の運命を統（す）べ治めると同時に、自ら選んだ民であるイスラエルとの間に特別な関係を持つ」
（『ヤバい神』42 頁）

歴史的経緯からして、征服者と征服された民なのだから、自分たちの民族を存続させたいとし、特別視する(神との契約となるのだろうか?) のは、いわば、自然な流れの様にも思えるけれども、そしてそれは、征服者と征服された者ではなくて、神が選んだ民とその他の民となるのだけれど、しかし、結果的には、差別を持ち込んだのです。

これに止まりません。次の段階では、民族内の差別が現れます。

「国家神は健康と幸福を保証し、大地の豊穡と家畜の増加を促進させる。国家神は共同体内部のバランスを確保する最高位の裁き手である。国家神は特に戦争の際、民を守り助けることが期待されている。」
（『ヤバい神』 30 頁）

「バビロンへと連行されたユダの人々の中に、マルドック崇拝へ走った者がすでにいたことは大いにありうる。マルドックを讃える行列に強い感銘を受けた捕囚の民は一人や二人ではなかつただろう。」
（同、 37 頁）

当然な事です。国家神が期待を裏切ったのですから。その結果、民族内でも、対立関係が現れてもおかしくない状況です。その時に、選別する方法が、唯一の神を受け入れ、自由意志（選択の自由）を受け入れるか否かで、選別しなければならないでしょう。ここでも、結果的に差別を持ち込みます。

さらに続きます。人の差別です。

上記の状況で、自由意志（選択の自由）を持つとしたら、これを行使出来る人とそうでない人です。これは不正確です。そうでない人とは、行使出来ない人と、一方の人が独断で決定し、根拠の無い主観的判断を下して、当然の事と見なした上で、そう思える人です。多分、それなりの理屈はあるのですが、一方の理屈でしかありません。

訳注（七） フュルチエール事典には「理性的靈魂だけが〈自由〉をもって生まれた。野蛮人の靈魂は〈自由〉と認識と選択をもって行動しない。」とある。

(ピエール・ショーニュ『自由とはなにか』400頁)

野蛮人などいないのだけれど、自らの基準を作って（ここに根拠などありません。）それを、絶対の基準とみなし、野蛮人なるモノを作り出し、差別するのでしょうか。野蛮人の霊魂など、一方の妄想でしかないのだけれど、あるべきだと・あると、自ら思い込んで、差別を作り出すのです。

フルチエールの生没年は1619～1688年ですが、黒人奴隷の扱いを定めた黒人法典は1685年成立し、1794年（第一次廃止宣言）に廃止されましたが、1848年（第二次廃止宣言）まで有効だったのですから、時代的には、切れ目なく続きます。黒人法典が突然成立したのでは、ないでしょう。

「理性的霊魂だけが〈自由〉をもって生まれた。野蛮人の霊魂は〈自由〉と認識と選択をもって行動しない。」（同、400頁）などとは、辞典が作られた時点では、極、普通・当然の事として、受け入れられていたのでしょうか。

黒人法典の第2条です。

浜忠雄「ハイチ革命研究序説（I） 黒人奴隷制、法と現実」より引用します。

「第2条 奴隷はすべてローマ・カトリックにより洗礼され、教道される。」（6頁）

無自覚に野蛮人と思っているのではなく、「洗礼され、教道され」なければならないとして、意識的に野蛮人を作り出しているのです。

『インドとイギリス』より引用します。

私の答に対して、オーストラリア在住のイギリス人女教師は悠然と反ばくしてきた。彼女は、自分の生徒に教え諭すような調子でゆっくりとしゃべりはじめた。

「あなたは、イギリスがインドに進んだ文明をもたらし、良い統治をもちこんだことを忘れてはいけません。考えてごらんください。インドに港をつくり、鉄道を敷設し、道路をつけたのはイギリス人です。インド人に近代的な工業技術を教えたのもイギリス人です。あなたがこれからインドを旅行してみるとわかりますが、英語は、インドのどこでも通用する唯一の言葉ですよ。それから、インドに政治的な統一をもたらしたのはイギリスですし、法による統治・代議制による政治を教えたのもイギリスです。」（吉岡昭彦『インドとイギリス』3頁）

「理性的霊魂だけが〈自由〉をもって生まれた。」（『自由とはなにか』400頁）人が文明の恩恵を受け、「野蛮人の霊魂は〈自由〉と認識と選択をもって行動しない。」（同、400頁）

人が、恩恵を受けただろうと、「理性」と云う根拠のないモノで、押し付けられます。

平等自由のはずが、理性で判別した仲間内の平等自由になり、それと同時に、差別が徹底されるのです。結局、平等自由を否定しているのですが、その程度は、否定のレベル（否定するのは在るからです。）ではなく、破壊して、消滅させようとするレベルです。

で、平等自由は無いのか、ですが、過去には在りました。

『ヒトの自然誌』内の市川光雄「平等主義の進化史的考察」より引用します。

「アフリカの狩猟採集社会では、食物に限らずさまざまな物資が広汎に分配される。とくに過不足を補う必要がない場合でさえ分配が行われる。そしてまた分配の方法が必要以上にこみ入っているのである。これらの点を考慮すれば、こうした分配が単なる物資のやりとり以上の意味をもつことは明らかであろう。それは、社会関係や価値観をも含むひとつの生活様式となっているのである。」（市川光雄「平等主義の進化史的考察」18頁）

「霊長類は一般に植物性食物に多くを依存し、栄養価の低いものをちまちまと長時間かけて食べる。いわば頻食型とでもいうべき摂食のリズムをもっている。人間の場合は雑食性で、その分だけ摂食の頻度はさがっているが、それでも人間が頻食型の霊長類の伝統を継承することは、食物さえあれば毎日規則的に食事をとる習慣や、頻繁な間食の存在などからも明らかである。おそらく人間には肉食獣のような食物の大量摂取は消化吸収能力の面からも不可能なのにはちがいない。

以上のように考えれば、食物分配すなわち生計における相互依存体制の生態学的基礎が理解できるであろう。それは、**頻食型の系譜をひく人間の安定した食物摂取の要求と巨大な食物の塊である獲物の不安定な供給状態との矛盾を解消するメカニズムとして働いている。**もちろん現在みられる分配のすべてがこのような生態学的理由にもとづいて行われているわけではない。しかし分配が習慣として定着し、生活様式にまで高められた背景には、このような生態学的な根拠があったものと考えてよからう。」（同、22頁）

「個々の成員は原則的に対等である。他人に対して威信をもとうとしたり、あるいは単に責任をとろうとするだけで、厳しい非難や嘲笑の対象となる。物質的であろうと、社会的あるいは精神的であろうと、出すぎた行為はすべてネガティブな評価を受ける。このような全面的かつ徹底的な平等主義が一般的互酬性とならんで彼らの社会を律する基本原理となっている。アフリカの狩猟採集民がこれほどまでに平等性に執着する理由は定かではないが、これが分配によって達成される物質的平準化の社会的次元への拡大であることは明らかであろう。

一方では北米のインディアンやニューギニアのビッグマン、南米のナンビクワラのように、分配（贈与）を威信獲得のポリティックスとして用いる社会がある。しかし他方ではアフリカ狩猟採集社会のように、物質的平準化を社会的次元にまで拡大し、総合的な平等を追求する社会もあるのである。このいずれのタイプの社会においても、分配（贈与）は多義的な行為であり、物質的なやりとりであるとともに負債のやりとりにもなっている。それを否定しようとするか、それとも積極的に利用するかによって、平等社会とそうでない社会に分かれるといえるであろう。」（同、24 頁）

「所有の分散化と社会的平準化にあずかった所有者と生産者（直接の獲得者）の分離の原理が、別の社会では収奪と支配の要件ともなっている点である。そうして分離の効果が頂点に達するのは賃労働と資本が分離した資本制社会においてであるが、分離自体は単純な狩猟採集社会にもあらわれている。すなわち、自然的な不平等を否定し、平等主義の維持にあずかったその同じ原理が制度的な不平等を準備したともいえるのである。人間にふたたび戻ってきたこの不平等は、道具や財に対する所有を媒介にしている点で霊長類段階における不平等とは根本的に異なっている。」（同、33 頁）

「以上が平等主義の進化に関する私自身のイメージである。私は実際に平等主義がこのような過程を経て変わってきたというつもりはない。そのような過程が実証的に明らかにされることもないと思う。それでもなおそうした進化の過程にこだわるのは、それによって平等主義のイメージがより豊かになり、より根源的な理解が得られると信ずるからである。」（同、34 頁）

後注

「(1) このような平等主義は個人の突出を抑えるゆえに「発展」の障害ともなる。たしかに資本主義社会の発展は競争とそれを通しての個人的達成の積み重ねによってもたらされてきたという面があるが、**資本主義社会と平等主義を建前とする社会ではそもそも志向するところが違うのである**。前者では効率化を通して生産や利潤の最大化が追及されるのに対して、後者では発展よりも社会の安定化と多数の共存が求められるのである。（同、34 頁）

平等な社会を意識して作り出していた社会があるのですが、その一方で、正反対の不平等を発生させる要因ともなっている事態は、前の自由意志が在るとして、不自由・不平等を生み出していた構造と同じ様に見えます。何がおかしいのか？

多分、在るか？ 無いか？ と今迄で問うて来ましたが、とすれば、硬直的になり、柔軟に考えられないのでしょうか。もれ落ちる要素の方が多いのでしょうか。「自由」の場合、多義的だと云われても、意味上の事ではなく、使用上の多様性の言い換えでしかないのだけれど、そうでであっても、在るとすれば、その様な要素が強調されるのだし、無いとすれば、又、同

様の繰り返しです。

多分ですが、人の作り出した概念を、現実の中で使い始めると、規定したと思う事態を外れる事になるのでしょう。

「実証的に明らかにされることもないと思う。」(同、34頁)

確かにそうなのかもしれませんが、平等なる枠組みを説得的に説いてあれば、それで充分です。

平等と表裏一体である自由・自由意志を行使したとする、追放の舞台のエデンの園での生活は、以下の通りです。

「主なる神は人を連れて行ってエデンの園に置き、これを耕させ、これを守らせられた。主なる神はその人に命じて言われた、『あなたは園のどの木からでも心のままに取って食べてよろしい。しかし善悪を知る木からは取って食べてはならない。それを取って食べると、きっと死ぬであろう。』」
(「創世記」2章『旧約聖書』3頁)

定住最初期の農業と狩猟採集を併用した状況の様ですが、追放されて下記の通りです。

「主なる神はへびに言われた、『おまえは、この事を、したので、すべての家畜、野のすべての獣のうち、最もよろわれる。おまえは腹で、這いあるき、一生、ちりを食べるであろう。』」

わたしは恨みをおく、おまえと女とのあいだに、おまえのすえと女のすえとの間に。彼はおまえのかしらを砕き、おまえは彼のかかとを砕くであろう。』

つぎに女に言われた、『わたしはあなたの産みの苦しみを大いに増す。あなたは苦しんで子を産む。それでもなお、あなたは夫を慕い、彼はあなたを治めるであろう。』

更に人に言われた、「あなたが妻の言葉を聞いて、食べるなど、わたしが命じた木から取って食べたので、地はあなたのためにのろわれ、あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。地はあなたのために、いばらとあざみとを生じ、あなたは野の草を食べるであろう。

あなたは顔に汗してパンを食べ、ついに土に帰る、あなたは土から取られたのだから。あなたは、ちりだから、ちりに帰る。』」
(「創世記」3章同、3頁)

「あなたは一生、苦しんで地から食物を取る。」「あなたは顔に汗してパンを食べ」と苦難の道が保証？されます。で、狩猟採集民はどうか？

マーシャル・サーリンズ『石器時代の経済学』から引用します。

「この数字がいみしているのは、ブッシュマンの男一人の狩猟＝採集労働で、四人から五人扶養しているということにほかならない。額面どおりにとると、ブッシュマンの食物＝採取は、第二次大戦までのフランスの農業よりも、はるかに効率的だったといえよう。

中略

ドーブ族の週労働は、大体十五時間、一日平均になおすと二時間九分ということになる。」

(マーシャル・サーリンズ『石器時代の経済学』33頁)

「全体の雰囲気は、労働とも気ままなレクリエーションともつかないものである...。」

(同、72頁)

「カパウク族は長期的にみると、農業におどろくほどすくない時間しかさいていない。

中略

男では一日当たり二時間十八分、女では一時間四十二分が、農作業の平均である。」

(同、73頁)

で、労働が「苦しんで」するものとするのは、誤解と偏見のたまものです。

狩猟採集生活から定住に移行したと考えられていますが、定住の断片的な証拠が紀元前12000年、に見つかり、城壁と領土を有する前駆国家については、紀元前3100年、に見つかっているのだそうです。(ジェームズ・C・スコット『反穀物の人類史』4頁)

とすれば、定住生活が始まってから、国家・身分制(不平等を受け入れる)まで、数千年、一万年近く、不平等を受け入れなかった歴史があるのです。

狩猟採集民の話など、大昔の事で参考にもならないと思っていましたが、一つに繋がっている、現代の課題そのものでしょう。

彼らは、「個々の成員は原則的に対等である」(市川光雄「平等主義の進化史的考察」24頁)と考えたのですから、子供・扶養される時期、大人・働く時期、老人・引退した時期までの能力差や、そして、男女の身体的な差などを、区別があるのを問題にしない事、そして、互いに尊重する事で、だから、対等なので、平等が実現出来たのでしょうか。

平等は差別が無い事だなどと、硬直的には考えていないのです。区別、だから、差別に繋がる事柄が無いのではなく、区別をしない事に依って差別を無くし、結果的に、平等な状態を作り上げたのです。意識的に作り上げたのです。

受け入れなかった歴史があるのだから、過去に別の世界が存在した事を思えば、何も目の前の資本主義経済体制が絶対的な存在であると思う・感じる・従う必要などありません。

最近、新しい資本主義などと云う、無意味な言葉も聞きますが、それと並行して、早々に、看板を下ろした様ですが、聞く政治と云うのがありました。聞いて、議論するのでしょうか

ら、重要な課題ですが、今に始まった事ではないでしょう。

一、廣ク會議ヲ興シ、萬機公論ニ決スヘシ

(『五箇条の御誓文』)

「第一条では、政治を行う際に多くの意見を求めること、政治に関して、全てのことを会議で話し合っけて決めていくことが書かれています。」(国立国会図書館国際子ども図書館)

とすれば、オルタナティブ社会論を論じるのは、当然の事であり、資本主義経済体制が自壊を始めた様に思う者には、必然です。

そして、自壊を始めたとはいえ、いつ、どの様なかたちを迎えるか不明の資本主義経済体制で、オルタナティブ社会が可能かだけでは無く、両立する可能性、資本主義経済体制に代わる可能性などが考えられます。当然の事として論じられるべきでしょう。

「いずれのタイプの社会においても、分配(贈与)は多義的な行為であり、物質的なやりとりであるとともに負債のやりとりにもなっている。それを否定しようとするか、それとも積極的に利用するかによって、平等社会とそうでない社会に分かれるといえるであろう。」

(市川光雄「平等主義の進化史的考察」24頁)

過去にも、併存していたのですし、「志向するところが違うのである。」(同、34頁)からです。

参考文献

スーザン・バック＝モース(岩崎稔・高橋明史訳)『ヘーゲルとハイチ』法政大学出版局、2017年

植村邦彦『隠された奴隷制』集英社新書、2019年

トーマス・マーレー(白田浩一訳)『ヤバイ神 不都合な記事による旧約聖書入門』新教出版社2022年
『新釈漢文大系・4・孟子』梁惠王篇下

ルソー(本田喜代治・平田昇、訳)『人間不平等起原論』岩波文庫、2017年

「創世記」(『旧約聖書』日本聖書協会)2008年

ピエール・ショーニュ(西川宏人・小田切光隆訳)『自由とはなにか』法政大学出版局、1995年

吉岡昭彦『インドとイギリス』岩波新書、1991年

浜忠雄「ハイチ革命研究序説(1) 黒人奴隷制、法と現実」『北海道教育大学紀要』第一部、B、社会科学編、
35(1)、1984年

市川光雄「平等主義の進化史的考察」(田中二郎・掛谷誠、編『ヒトの自然史』)平凡社、1991年

マーシャル・サーリンズ(山内昶、訳)『石器時代の経済学』法政大学出版局、2021年

ジェームズ・C・スコット(立木勝、訳)『反穀物の人類史』みすず書房、2019年